

## 大阪大学における留学生支援の現状 －留学生に魅力的な大学とは？－

大阪大学国際教育交流センター  
近藤佐知彦

### [アブストラクト]

Global Campus Net, Osaka(以下 GCN)とは 2003 年度から大阪大学で運用されている「留学生のための情報ポータルサイト」です。留学生や外国人研究者を対象としてネット上のワンストップサービスを目指したものです。ユニコード利用の多言語 BBS を一つの核として、日本語教育、奨学金情報、ビザ情報、リサイクル情報、保健医療情報、子育て情報などに加え、外国人可の住宅情報まで、大学関係者だけでなく自治体や NPO、企業の協力も得て外国人フレンドリーなキャンパス環境を創造してきました。もともとは工学研究科で始められたプロジェクトですが、様々な変遷を経て 2010 年度からは国際教育交流センター内に開設された「サポートオフィス」でマネジメントすることになりました。対面ワンストップサービスであるサポートオフィス業務を補完するものとして位置づけられています。大学国際化拠点整備事業(いわゆる Global 30)採択に伴って、2010 年 4 月には全面的なサイトリニューアルを行いました。そして ID 取得者を対象に希望条件を不動産業者と「交渉」することが可能になる「住宅リクエスト」、タクシーによる関西空港からの「送迎サービス予約」システム、そして日本人学生を対象とした「チューター希望者登録」システム等の新機能・サービスを付け加えています。本学の正規ホームページは日英両語に完全対応となり国際化が進んでいます。しかし外国人にとって重要な生活情報やサービスが「.ac.jp」のサイトだけで提供できるわけでもありません。NPO や企業の支援も受けた垂直的な情報やサービス提供に加え、外国人同士の水平的な情報流通環境(BBS)も GCN で整備をしつつ、大阪大学ではキャンパスの国際化を推進しようとしています。

### [キーワード]

留学生支援、多文化共生、情報ポータル、オンラインコミュニティ、大学国際化、地域国際化

## 1. はじめに

大阪大学の留学生・外国人研究者を主な対象としたオンラインコミュニティサイト、Global Campus Net Osaka(以下 GCN)は、工学研究科留学生相談部、芦沢真五助教授(現明治大学特任教授)が 2003 年度から 2005 年度にかけてフロンティア研究機構の助成金を受けて行った実証研究を母体としてスタートした。2006 年から 2009 年の間は創立メンバーの一人だった筆者が代表を引き受け、研究室内に運営事務局を置いた。現在 GCN は Global 30 後に国際教育交流センターに設置されたサポートオフィスが運営しているが、筆者もアドバイザーとして関わっており、その立場から報告を行いたい。

GCN の第一の目的は、留学生・研究者が来日前、来日後、帰国前、帰国後それぞれの段階で必要な情報をオンライン上で得られるという「ワンストップサービス」をオンライン上で実現することにあつた。同時に大阪大学の留学生や研究者の受入れを担当する教職員が必要な手続きについて調べたり、大阪大学周辺の地域住民(日本人・外国人問わず)が情報を授受するのに役立たせることも出来るため、学内関係者や地域の人々の広い意味での国際化に関するポータルとして機能することも意図されてきた。外国人に関する必要情報を選択・集中し、垂直的・もしくはトップダウンで提供する「情報ポータル」としての機能が集約されれば、外国人にとってはキャンパスの魅力が向上し、外国人をサポートする側にとっても利便性が高い。

第二の目的は、「コミュニティ・ソリューション」という概念を用いて、情報を一方的に得るだけでなく、サイトに参加しているすべての関係者が必要に応じて情報提供者となりうる「場」を提供することが構想された。目的のかなったサイト設計を行い、また適切な運用ができるならば、オンライン上で外国人によって外国人の問題を解決するコミュニティができるのではないかと、という発想がその根本にある。具体的な事例は後述するが、多言語掲示板 BBS では提供してそれぞれの自国語で書き込みができるようにするなど、外国人による外国人のための「水平的な相互扶助の場」を提供しようという発想があつた。

大学国際化と一言で言っても、それは大学の構成員だけで達成できるものではない。GCN 第三の機能として、志を同じくする学内のみならず地域有志や NPO のパワーを結集し、また行政やビジネスの受け皿になるこ

とがあげられる。外国人同士のコミュニティ・ソリューションに加えて、「キャンパス周辺の力を取り込むサイト」として構想されたのが GCN なのである。そのためには外国人にサービスを提供するための企業との連携も視野に入れる必要があり、従来の「.ac.jp」の URL を持つサイトから、多少の距離を置いたサイト運営が必要となってきた。垂直的、水平的な留学生のサポートという概念に加えて、地域からの面的な広がりを持たせて支援するという発想である。

本稿では GCN のコンテンツを紹介し、上記三つの観点から GCN がどのように運営されているのか、またどのような課題を抱えているのかを論じたい。以上を通じて「留学生支援」という側面から、大学におけるオンラインコミュニティの運営について話題を提供できればと考える。ちなみに URL は「<http://www.gen-osaka.jp/>」であり、実際のサイトを参照しながら読み進んでいただくとありがたい。

## 2. GCN のコンテンツ

GCN では多数のコンテンツメニューを用意している。以下、それぞれのコンテンツについて説明を行う。

### 2.1 日本語学習

初級レベルの日本語学習者のための「GCN いちよう日本語」、理工系日本語学習教材、2004 年度に開発された「キャンパス単語帳」、「場面会話集」、2005 年度に開発された「学校単語帳」そして『漢字と言葉』自主学习システム」等が中核となる。

「GCN いちよう日本語」は、大阪大学に所属する研究者、留学生や研究者の配偶者を対象にした国際教育交流センターの配偶者・研究者向けクラス「いちよう日本語」の授業内容にそったかたちで作成された。当時「いちよう日本語」を担当していた講師によって開発され、日本語の自学自習リソースとして利用すると同時に「いちよう日本語」参加者の復習や欠席した授業の内容の補習としても昨日するように企画された。テキスト、クイズなどがダウンロードできるようになっている。

「キャンパス単語帳」は、大学のなかで日常よく耳にするキャンパス独特の省略した言葉（追試、学食など）や、大阪大学独自の言葉「再履バス」（注：吹田、豊中キャンパス間を結ぶ連絡バス・共通教育科目の「再履修」のために使う学生が多い）、「館下」（注：豊中キャンパス図書館下の食堂）、北摂地方独特の言葉「いないち」（注：国道 171 号線）、「千中」（注：千里中央）などローカルな言い回しを集めた単語帳であり、現在 165 単語を掲載している。これらの言葉は、日本語教育では通常教えられることが少なく、日本語の流暢な外国人であっても理解することが困難である。単語帳を開発するにあたり、現役の学生（日本人学生および留学生）にヒアリング調査を行い、彼らが日常の会話で頻繁に使っている単語を取り上げた。なかには教授や世間一般の人には使っても分からない、あるいは失礼にあたるような若者の間でしか通用しない単語もあり、使用には注意を払うことを明記している。1 単語につき 1 ページを使用し、英訳や読み方、その他の情報を掲載し、音声で発音も確認できるようになっている。

「学校単語帳」は、札幌のボランティア団体「あかり」（当時）が作成した学校で使用される用語集「みんなで一緒に」から提供を受け、大阪地域のものに合うよう改良を加えたものである。掲載単語としては、「校長先生」「算数」「靴箱」などがあり、全部で 331 単語掲載している。英語のほか、中国語、韓国語、スペイン語での翻訳がある。翻訳だけでは理解が困難なものについては、説明や写真を掲載した。主に小学校に通う子供をもつ留学生や研究者だけでなく、地域に住む外国人にも利用していただけるものと考えている。

『漢字と言葉』自主学习システム」は、国際教育交流センターの教授が出版した漢字学習教材『例文で学ぶ漢字と言葉』（スリーエーネットワーク、2005 年）をオンライン上で練習・テストできるように開発されたものである。日本語能力試験 2 級の漢字 1,023 字および語彙 2,920 語について、無作為に抽出して練習できるようになっている。学習（成績）履歴も残すことができる。

GCN の ID 申請時でのコメントに、「日本語を学習したいから」というものがしばしばみられ、留学生等を GCN に誘引する際のキラーコンテンツになっていることが読み取れる。しかしサイト開設から相当の時間が経過したため、内容の陳腐化や e-learning ソフトのサポートの問題なども発生しており、今後ともこれら利用者のニーズにあった学習教材を開発していく必要がある。もちろん e-learning だけではなく、近隣の NPO 等による日本語教室情報も掲載して、多彩な日本語学習ニーズが汲み上げられるよう努力をしているところである。

### 2.2 地域情報・生活情報・ビジネスとの連携

留学生や研究者も地域に暮らす一住民として受け入れなければならない。また周辺地域に溶け込めねば大学での研究成果も上がらないかもしれない。GCN では、地域情報の提供にも力を入れてきた。

「保健・医療」では、外国人が健康に暮らせるための情報提供を行っている。特に、制度、生活習慣の違いから理解できない項目や専門的なことばについて平易な表現を用い、分かりやすく説明を行っている。コンテ

ンツには、「国民健康保険の説明」、「救急時の対処」、「各種医療機関の紹介」、「多言語問診表の掲載」などがある。このコンテンツは、外国人の医療問題を専門に研究を行っている人間科学研究科の教授および大学院生にコンテンツ作成をしていただいた。

「子育て」では、「子供の健康管理」、「地域の保育サービス」、「子育てサポート情報」、「学校」、「アレルギー」、「虐待」、「困ったときのお役立ち情報」など、子供を持つ外国人にとって有益な情報の提供を行っている。

「暮らし」では、「災害時の対処方法」、「交通事故の処理方法」など実際の生活を営んでいくために必要な情報を NGO の協力を得て掲載している。大阪近郊各市の情報として、豊中市からは、豊中市が発行するお知らせの英語、中国語、韓国語、スペイン語版によるチラシの提供を受け、掲載している。

2005 年度に開発された「住宅情報」コンテンツでは、大学内外の宿舎情報を掲載しており、地域の住宅斡旋業者の協力を得て、最新の宿舎情報を提供している。住宅情報検索システムを導入しており、地域、家賃、広さ、などの好みにあった項目を選択し、物件を検索することができる。留学生のニーズに合わせ、地域の協力業者には、比較的安い家賃(保証金)で家族も住める物件を提供するよう依頼している。

2010 年には新たに「住宅リクエスト」も付加した。

これは留学生等が希望条件を打ち込むと、その条件に叶った、もしくは近い条件の物件について、いくつかの不動産業者から個別に連絡をして頂くものである。前記の「住宅情報」コンテンツが町の不動産屋さんの窓ガラスに張られた物件情報を眺める、といった閲覧型のものであるのに対し「住宅リクエスト」は、そのガラス戸を開けて不動産屋のおじさんとコンタクトをするところまでを支援しよう、という試みと考えていただきたい。大阪大学生協など、信頼できる複数の不動産エージェントにご協力頂いており、新しく学生が渡日する時期や、学内宿舎を出ることになった学生が次の宿舎を探す時期を中心に、毎月数件から数十件の問い合わせが入り、それぞれに対して 2-3 件のレスポンスを得る状況となっている。

本学では 1600 人程度の留学生数に対して、学内宿舎が 350 人分程度、学外に手配することが出来る公的宿舎が 350 人程度にとどまる。留学生宿舎の増設など根本的な解決が望めそうにない状況下では、民間エージェントの力を活用した積極的な情報提供をもって、大学として供給できる戸数と必要戸数の間のギャップを埋めていく工夫が必要になるとかんがえ、現在積極的にテコ入れをしている部分である。

そしてまったく新しいコンテンツとして 2010 年から運用を開始したのが、タクシーによる「関空送迎予約」サービスである。阪大の関連宿舎施設等にアクセスが必要な方に、比較的安価な協定料金で関西国際空港からのリムジンサービスを提供する、と言うもので、個人タクシーのグループと協定を結んでサービス提供をお願いした。グループからご提示頂いたのは、メーター料金よりも格安で、しかも高速料金込みの固定料金であり、数人でシェアをすればリムジンバスを利用したり電車を乗り継ぐより安くなる場合も多い(迎えが 1 台 17000 円、送りが 1 台 19000 円)。なによりも、関西空港に着陸した時点でプロフェッショナルな「お迎え」が来ているという安心感が重要ではないだろうか。現時点ではさほど利用は伸びていないが、今後に期待できるサービスだと考えている。

## 2.3 日本人学生向けに

「留学」では、大阪大学から海外に留学する学生が必要な情報を掲載しており、サマープログラム、交換留学などの紹介、手続きなどの紹介を行っている。大阪大学独自の派遣のための奨学金の情報も掲載している。

もう一つ力を入れているのは「チューター登録システム」だ。

大阪外国語大学との統合後、本学学生の中には外国人留学生との交流の機会を求める声が高い。一方、様々な受け入れプログラムが開発される際に「学生チューター」を活用して、参加留学生と日本人在学生双方の国際性を一気に高めたい、という気運も盛り上がってきた。そのため日本人学生に GCN の ID を積極的に取得させ、チューター希望者として GCN 内で登録を促進、プログラムが必要とする場合には運営者が声をかけることが出来る候補者としてプールしておく、という運営をはじめた。運用開始以来約一年の現時点では 300 人弱が登録しており、積極的な日本人チューターの存在が、本学にやってくる留学生と大いに交流し、大学の魅力を高めてくれることを期待しているところである。

## 2.4 大学内外の必要情報

GCN は留学生にとってニーズの高い情報を提供している。

「奨学金」では、留学生に関係する奨学金情報を掲載しており、最新の奨学金情報を提供している。大阪大学全体の奨学金であれば、その都度掲載する。これは、学内の掲示板に貼っているものと同じではあるが、掲

示板に見に行かなくても、学外からもアクセスしみる事ができるため、留学生にとっては便利なツールであると思われる。もちろん部局ごとの奨学金情報も掲載することができる。

「求人情報」では、留学生のための就職情報や企業説明会情報を提供している。留学生に対する企業からのニーズの高まりにあわせて、今後は様々な企業の求人情報アルバイト情報を掲載していく予定であるが、現時点では情報の選別についてキチンとした方針が立てられていない恨みがある。そのため現時点ではキャリアセミナーなどの直接の求人情報ではない情報などが提供されている場合が多い。

2006 年度に開発された「ビザ」では、留学生・研究者に関係のあるビザの情報を提供している。留学生・研究者は、来日前、一時帰国、家族呼び寄せ、更新、滞在延期、資格変更、資格外活動、など、その時々に応じてビザになる情報を、記入例を記載したり、書類がダウンロードできるようにするなど、行政書士の監修のもと必要な項目を網羅した。

一方、2010 年以降、強化されたサポートオフィスでは、web を利用して新規渡日者の CESR(在留資格認定証明書)の取得を支援するシステムを構築しており、一部その機能や対象者の重複が発生している部分にもなっており、今後、調整を考えている。

## 2.5 多言語掲示板

プログラム創設時から本サイトの大きな特徴の一つは、掲示板への書き込みが多言語で行えることである。サイトは日英の併記であり、どちらかの言語ができれば、情報は全て入手できるようにデザインされている。しかし、本学の留学生のうち大多数は、日本語、英語ともにネイティブでない者であり、またその配偶者家族なども視野に入れたサイト運用のためには多言語によるサポートが適当であると考えられた。

外国人関係者が多言語掲示板を利用し、母語で質問の書き込みを行い、その言語の分かるものが回答し、問題を解決できるという「水平的」かつ自律的な相互扶助を可能にすれば、大学側のケアの労力を多少なりとも削減出来る。またそれは大学の状況を「先輩」が「後輩」に伝える場ともなり、大阪大学について情報の乏しい留学希望者などにとっては、キャンパスや周辺環境の「見える化」につながる。

実際にあった書き込み・質問の例としては、ムスリムの研究者帯同家族からの質問として、大学周辺に外から見えない(ガラス張りではない)美容院があるのか、という質問があった。少し考えてみればわかる話なのだが、こういった質問・疑問は日本人だけで外国人支援のシステムを構築する時には見落としがちなポイントである。美容室は明るいガラス張り、という固定観念を持っていた筆者にとっては、大学の魅力向上にはこういった視点も必要なのか、と深く考えさせられる契機となった。

BBS は、こういった質問に「先輩ムスリム」が情報提供をするような形で、外国人同士の相互扶助が行われることを目指してきた。そのやり取りがそれぞれの言語で行われることにより、本学周辺の環境や「暮らしやすさ」などを、先輩留学生が広報してくれる態勢を整える、それが GCN 創設時から BBS に期待された大きな役割である。

## 2.6 GCN Worldwide

GCN Worldwide (GCN-WW) は、以前は別サイトであったが、2006 年 5 月に GCN に統合された。GCN-WW は、大阪大学同窓生のためのサイトであり、主に大阪大学を卒業(修了)した留学生、海外在住日本人卒業(修了)生を対象としている。GCN-WW の中身は、一言で言えば選択的メール送受信システムであり、登録しているメンバー(注:学生は在学時代の ID を引き続き使用。また希望があれば身元確認の上発行している)を国名、出身部局などの条件で検索し、検索された同窓生あてにメッセージが配信できる、というものである。例えば、某国で同窓会を開催したいときに、某国在住の同窓生にあててメッセージを送信し呼びかける、海外に学会に出かけるときに現地に住んでいる同窓生から情報をもらう、など、その利用方法は様々考えられる。

2006 年 10 月には、新たに「総長からの挨拶」、「阪大生は今」、「拠点便り」、「各種情報」のコンテンツを加えた。「阪大生は今」では、同窓生から阪大での思い出、現在の仕事や行っている活動について文章と写真入りで紹介している。「拠点便り」は、大阪大学が設置している海外拠点(教育研究センター)、サンフランシスコ(米国)、バンコク(タイ)、グローニンゲン(オランダ)に駐在している職員からセンターの活動報告や業務内容、現地の状況などについて報告をいただいたものを掲載してきた。

現時点で自戒の念を込めてコメントすると、オリジナルの GCN をデザインする時、我々の念頭にあったのは GCN-WW を(バーチャルな)大阪大学の国際同窓会として機能させることは出来ないか、という問題意識だった。大学のサイトにアクセスする ID は学籍や身分がなくなると使えなくなる。一方 GCN の ID については、卒業後もそのまま使えるため、その ID を利用すれば、GCN は卒業後も大学とつながっていく「場」として使えるのではないかと目論んでいた。その意気込みやアイデアについては先進的なものがあったと自負している。残念な

がら BBS も GCN-WW も現時点では思ったほどの成果は上がりず、また、Facebook など SNS 系のサイトの台頭によって我々が意図してきたところの多くの部分を実現しはじめた、と言う印象を持っている。

### 3. GCN が目指したところと現実、そして運営体制

以上コンテンツを概観したところで、若干のコメントを加えながら運営におけるポイントをコメントしてみたい。まず「日本語学習」は外国人にとって常にニーズが高く、GCN 加入の大きなモチベーションになり得る。この日本語教材を ID 取得者のみにアクセス可能にすることで、事務局としてはアクティブなユーザーを増やすという意図があった。そしてコンテンツ毎のアクセスデータを見る限り、その意図は十分に果たされている。今後は内容の陳腐化、開発時以来の OS の変遷などもあり、ソフト更新の必要性など、日本語をキラーコンテンツとし続けるためには、いくつかの課題が残っている。

垂直的な情報提供としては、奨学金情報、住宅情報の掲示や地域イベントの告知など、比較的一方的に主催者側・大学側から情報が流れるような豊富なメニューを用意してきた。また医療・子育て情報など、日本や地域に特有で、しかも人によっては非常に重要な情報についても、一覧性を高めた上で網羅することで、本学が外国人それぞれのニーズに真剣に向き合おうとしている、というメッセージを発することにもなる。外国暮らしは多少なりとも不安なはずで、GCN が外国人フレンドリーな大阪大学をアピールするツールとして、いろいろな局面で使われている。ただし、豊富なメニューをアップデートし続ける努力はなまかななものでは済まない。そのために、限られた人員の中で、内容の精選と精査、そして必要情報の吟味が求められている状況である。

水平的な相互扶助(多言語掲示板 BBS)に関しては、構想段階で中心に据えられたテーマであった。しかし現実としては一般的な BBS として、リサイクル情報、イベント情報の告知などに使われるに止まるケースが多い。残念ながら当初の目論見のように、多言語である利点を生かして「新規渡日者の(母語での)不安表明→日本滞在者による(母語での)助言→新規渡日者の不安解消→第三者の学生に対しても、本学キャンパスと周辺環境の『見える化』』という明確なサイクルを形成するまでには至っていない。しかし、先に示したムスリム女性の美容院問題のように、我々が気がつかなかったポイントを炙り出すユニークな機能があり、問題発見ツールとしてその部分を生かすことが今後の課題となる。

同様に GCN-WW もタイ同窓会や北米同窓会での同窓生への呼びかけなどに使用された実績はあるが、非常に活発に使用されている、というレベルにはない。現在若者達の間でそのような役割を担っているのは SNS 等のサービスのように思われる。2003 年に構想された時には相当先進的かつ野心的な企画であったと思われるが、今後もっと留学生等を惹きつける仕掛けをどう組み立てていくかについて、真剣な検討が必要であろう。

地域やビジネスを巻き込んだ「面的なサポート」は、現在のところ GCN がもっとも力を入れてすすめている部分であり、また効果が出ていると自己評価している。「住宅リクエスト」や「閑空送迎サービス」等がこれにあたる。対面ワンストップサービスである「サポートオフィス」は学内組織として、ある程度の中立性を保たねばならない。したがってサポートオフィス自体の HP にも企業やビジネスとの関係情報などは掲載することができない。一方サーバーを学外に置き「.ac.jp」ドメインをもたない GCN では、金銭の授受などには関与しないものの、比較的柔軟にそれらの情報やサービスを取り込んできた。そしてそれを売り物にしている。GCN 運用によって本学が学生をサポートするために何が必要かを「建前」にとらわれずに提供出来る受け皿を得たとも好意的に評価出来るのではなかろうか。

現在 GCN の運営事務室は国際教育交流センター内のサポートオフィス(正式名称は Support Office for International Students and Scholars)におかれている。ちなみにサポートオフィスの業務は国際交流室の下におかれた「サポートオフィス運営委員会」によって所掌されており、GCN も含めて全学にサービスする全学の組織、という性格付けとなっている(筆者も委員の 1 人)。サポートオフィスは 2 名の教員(特任准教授と特任助教)と 2 名の特任職員、そして数名の非常勤職員によって運営されているが、その中でも特任助教が各種業務の一環として GCN の統括にあたり、非常勤職員によって日々のメンテナンスが行われている。メンテナンスとしてはコンテンツの配信に始まって BBS 書き込みのチェックやサイト管理、ID 希望者の身元確認と ID 発行、GCN の管理会社との連絡や交渉等までが含まれており、きわめて多忙な内容となっている。ちなみに財政的な基盤としては Global 30 による補助金をもって充てられており、特に Global 30 採択初年度には、サイトデザインのリニューアルやいくつかの新機能の付け加えなど、サイトのリフレッシュが図られてきた。

### 4. むすびに代えて

最後にいくつかのデータを示しつつ稿を閉じる。

2004 年 2 月にサイトを立ち上げて以来、発行された ID は 7764 件(8 月まで)に上る。過去一年の訪問数は 56,537 件。ユーザー数は 35,475 のユニークユーザーがいた。たとえば BBS への書き込みや日本語教材利用、

もしくは「住宅リクエスト」を出す権利を持つユーザーは8000人弱としても、とにかく情報を利用する、もしくは単にBrowseするユーザーが多数いることから、これらの利用者に対して「キャンパス環境を『見える化』する」努力をアピールするために、もっともっとGCNは利用できるだろう。

目下のところ Facebook などを通じて、コミュニティを繋ぎ、パーソナルな情報流通を活発化する動きが進んでいる。GCN が目指すローカルなコミュニティでは、できれば大学キャンパス周辺の空気の匂いや、竹藪のざわめき、そしてキャンパスや周辺の住民の息づかいを伝えられるような、そういうサイトを目指していくべきだと考える。そのためにどうすればいいかを今後とも全学で考えていく必要があるだろう。

また近隣のコミュニティと共生していくため、仮に互恵的なビジネスが成り立つならば、そういうものを取り込んでいってこそその「コミュニティ・ソリューション」と思われる。多い時には月に40件以上の問い合わせがあった「住宅リクエスト」がその一例だが、閑空送迎サービスなども利用の伸びを期待しているところだ。また「チューター登録」も、外国人をサポートしたい日本人学生と、日本人の友達を作りたい外国人留学生との間の互恵的な関係をつなぐ仕組みであり、どちらにも利益がある。大阪生まれのサイトに相応しく、GCN は関係者全員にとって「お得な」サイトでありたい。

そして前節までで触れたようにGCNは「.ac.jp」から自由なサイトとして、「建前」にとらわれない利点を大いに利用してきた。今後はこの柔軟性を維持しつつ、「しがらみ」にもとらわれず、自由闊達でかつ外国人フレンドリーな校風を作っていく、大阪大学の大きな基礎に育ってもらえれば、と願っている。

## 【参考文献】

近藤佐知彦・渡部留美「大学における留学生・研究者のためのオンラインコミュニティ GCN(Global Campus Net) Osaka の運営現状と課題」『多文化社会と留学生交流』11号(PP65-72)2007年  
金子郁容「新版コミュニティ・ソリューション: ボランティアな問題解決に向けて」岩波書店 2002年